

測地學及び地球物理学の國際同盟

既報の如く、第7回國際測地學地球物理学同盟總會は去る1939年9月4—15日、米國ワシントン府で開かれた。勿論、これは今回の歐洲戰亂が起つてからのことであつて、恐らく次ぎの平和が當來するまでの最後の國際學術大會議であらう。ちなみに、此の總會は、

- | | | | | | | | |
|-----|-------|----|-------|-----|-------|-----|----------|
| 第1回 | 1921年 | 伊國 | ロマ市 | 第2回 | 1924年 | 西國 | マドリド市 |
| 第3回 | 1927年 | 捷國 | プラハ市 | 第4回 | 1930年 | 瑞典國 | ストックホルム市 |
| 第5回 | 1933年 | 葡國 | リスボン市 | 第6回 | 1936年 | 英國 | エジンバラ市 |

で、それぞれ開かれたものである。又、今回のワシントン會議では、若し世界の平和が來るならば、次ぎの第8回總會は1942年ノルエ1國で開くことを決議した。

ワシントン會議の始まる直前、即ち8月30日に、總會議長 D. La Cour 博士と、總幹事 H. St. J. L. Winterbotham 少將は、當時既に歐洲の國際勢狀が頗る切迫してゐたのを見て、開會地米國の準備委員會や其他の學者たちと協議の上、全世界の加盟團體に打電して、會議は豫定の如く開かれること、但し議題は必ず學術上の問題に限ることを通報した。この第2の條項は當然實務委員會の事後承諾を獲る筈であつたが、勿論その通りになつた。時局のため、各國各地からの代表者中には、首尾よく米國へ渡つた後に本國へ呼び返されたもの(佛國代表者全部、英國代表者の大部分、及び政府の官吏たるもの)や、本國を出發したが米國へ到着しないもの(獨國代表者團、但し先着の一人を除く)や其の他、逸早く旅行を取り消したもの等があつて、缺席者は多かつた。そのため、會議中に行はるべき諸種の事務、即ち規則の改正や、役員の改選等を取り止めとなり、當分の間、従前の役員が就任のまゝとなつた。故に、前記、會長と總幹事のほか、(*印は缺席)

- | | | | | |
|--------|----|--------------------------|----|--------------------|
| 測地學部： | 部長 | Meinesz 氏 (蘭)， | 幹事 | Perrier 氏* (佛)， |
| 地震學部： | 〃 | Heck 氏 (米)， | 〃 | Rothe 氏* (佛)， |
| 氣象學部： | 〃 | Chapman 氏 (英)， | 〃 | Bjerknes 氏 (ノルエ1)， |
| 地磁氣學部： | 〃 | Fleming 氏 (米)， | 〃 | Goldie 氏* (英)， |
| 海洋學部： | 〃 | Helland-Hansen 氏 (ノルエ1)， | 〃 | Proudman 氏 (英) |
| 火山學部： | 〃 | Michel-Levy 氏* (佛)， | 〃 | Signole 氏* (伊)， |
| 水路學部： | 〃 | Lütschy 氏* (スキス)， | 〃 | Dienert 氏* (佛) |

但し、水路學部では副部長 Slettenmark 氏 (スエーデン) が座長をつとめ、又火山學部では Adams (米) が臨時に部長となつた。總幹事 Winterbotham 氏も、開會前に本國へ歸つたので、前會の會長であつた W. Bowie 博士 (米) が

代理をつとめ、又、缺席幹事 5 氏の役目は皆臨時に米國の代員が當つた。

現在、この同盟には 32 ヶ國が加盟してゐるが、實際に出席したのは其のうち 20 ヶ國(プルヘンチナ、白、カナダ、チリ、コロンビヤ、デンマルク、アイル、フィンランド、獨、英、ギリシヤ、オランダ、日本、メキシコ、ノルエー、ポーランド、ルマニヤ、スエーデン、スウェーデン、米)であり、尙ほブルガリヤ、ドミニカ、ホンガリヤ、インド、フィリピン、ゴネズエラ等の未加盟國から客員が出席した。出席者中には米國人が最大多數(約 300 人、内、會員外のもの 100 名)を占め、他國の代表者は 95 名(うち、會員外は 25 名)で、(我國からは本會員松山博士)出席者數から言へばレコード破りの多數であつた。只、佛伊兩國代表者(前はロシヤからの客員もあつたのに)が皆缺席であつたのは遺憾であつた。——以つて、戰時下に於ける國際學術會議の模様も想像されるわけである。

新しい事務關係の協議を省いたため、支出事項の計畫を止め、資金のある限り、全部従前通りの會計としたが、幸ひにして、同盟は未費消の資金を若干有つてゐるので、今後、各國からの獻金は減ずることを見越しつつも、尙ほ同盟本部や各學部内の事業は、平和が到來するまで續行することとなつた。

主催地たる米國では、準備委員會(委員長 R. M. Field 博士、幹事 J. A. Fleming 博士)の特別な盡力により、費用其の他の點に於ても非常に有効に働いた。この非常時にも拘らず、米國政府は此の會議開催について有らゆる援助を惜まず、開會式では國務卿 C. Hull 氏の歡迎の辭があり、又、大統領 Roosevelt 氏は Field 博士と共に、閉會に臨み同盟や各學部の役員を全部引見した。國務卿の歡迎辭中には、次の言葉があつた。

“私が國民一般と共に熱心に希望しますことは、將來、いつか、世界の政治家たちが、理學者諸氏の範に習ひ、國際的な政治問題を、諸氏の如き權威と友誼の精神によつて解決せんことであります。”

同盟や各學部の會合は、すべて、George Washington 大學で開かれ、萬事順調に運び、又、諸所の見學や訪問等があり、至る所、米國朝野の親切な態度が現はれた。會長と總幹事とはジョージ・ワシントン大學から學位が贈られた。

汎米地理歴史學會(會長はメキシコの P. C. Sanchez 博士)は本同盟と協力し、同會館で 3 回の實務委員會が開かれ、測地學及び地球物理學關係の重要事項が協議された。(チャプマン氏、Nat. 3651 より)

質疑：神武天皇御即位の皇紀元年頃は、何星が北極星でしたか？ (天文狂)

答へ：今の“小熊座”の β 星でした。